

『蝶々夫人』構成ノート

田口 道子

本日の公演は皆様に『蝶々夫人』をハイライトでお楽しみいただきます。

この作品は全曲が、どの部分も聴きどころではあるのですが、有名なアリアや二重唱、三重唱を中心に、物語の内容が皆様に良く伝わるように構成いたしました。

出演はバタフライ／蝶々さん(ソプラノ)、スズキ(メゾ・ソプラノ)、ピンカートン(テノール)、シャープレス(バリトン)の4名です。

自らをヤンキーの流れ者と称す海軍士官ピンカートンは結婚式に参列するためにやって来たアメリカ総領事シャープレスに「真摯な気持ちで結婚するのではない」と言い、まるで寄港地のどこにでも現地妻がいるかのように自由を謳歌します。「世界中どこでも」

それに反してバタフライはこの結婚を心から喜んで嫁いでくるのです。「私は世界一幸せ」

しかも愛する人と同じ神様を信じたいと改宗までしました。「昨日私は一人で教会へ」

改宗に激怒した叔父の僧侶ボンゾに祝宴は中断され、親族から絶縁されて泣き崩れるバタフライをピンカートンは優しく慰め、美しいバタフライに魅了されます。(愛の二重唱)

幸せな結婚生活も東の間、ピンカートンは旅立ってしまいます。それから便りもないままに三年が経ち、バタフライは毎日港を眺め、帰りを信じて待っています。「ある晴れた日」

そこにピンカートンからの手紙を持ってシャープレスがやって来ます。(手紙の二重唱)

実は手紙には間もなく長崎に寄港するがアメリカ女性と結婚したことをバタフライに伝えて欲しいと書いてあったのですがシャープレスには告げる勇気がありません。遠回しに金持ちのヤマドリとの結婚を勧めるとバタフライは子供を連れてきます。「この子は?」

いたたまれない気持ちでシャープレスは帰っていきます。そこに響く軍艦の大砲の音。バタフライはピンカートンのために家中を花でいっぱいにするのでした。(花の二重唱)

一睡もせずに夜明けを迎えたバタフライがスズキに促されて休みに行くピンカートンが妻を連れシャープレスと共にやって来ます。「誰かしら?慰めようはない」

花でいっぱいの家。ピンカートンは自分の軽率さを恥じます。「さらば愛の家よ」

喜び一杯のバタフライはピンカートンを探しますが、そこにいたアメリカ女性を見てバタフライはすべてを察します。死を覚悟したバタフライ。まさに自害しようとしたとき息子が現れます。「可愛い坊や」

あまりにも有名な作品の内容は皆様もよくご存じのことと思いますが、物語はバタフライの気持ちを知れば知るほど切なく、涙を誘います。皆様により深く内容をご理解していただこうと、曲と曲の間に短い語りを入れることにしました。皆様の想像によって、まるでオペラ劇場で舞台をご覧になっているかのように進行できればと願っています。

語りではバタフライを結婚式までは蝶々さんと呼んでいることをお断わりしておきます。

(たぐち みちこ・演出家)